

## 白川郷の養蚕

養蚕は遅くとも 18 世紀までには白川郷で始まっており、19 世紀後半には地元の主要産業となりました。この地域の特徴である、急傾斜の三角形の屋根を備える合掌造りの家が多く建てられるようになったのもこの時期でした。実際、合掌造りの家屋が流行った主な理由は、養蚕に適していたからです。典型的な合掌造りの家には、傾斜した屋根の裏の部分に広い屋根裏部屋があり、そこは複数の層に分かれています。切妻の端にある窓から日光と空気が入るので、屋根裏部屋は明るく換気の良い空間となります。さらに囲炉裏から格子天井を伝わって上昇してくる熱と煙により、暖かく乾燥した状態に保たれます。こうした要因が合わさって、屋根裏部屋は寒さと湿気に敏感な蚕を育てるのに理想的な場所でした。白川郷は、合掌造り家屋・蚕の餌となる桑を近くの傾斜地で栽培できたこと・十分な労働力が確保できたという要因が重なり、江戸時代後期（1603 年～1867 年）から 20 世紀初頭の数十年の間、周辺地域の中でも指折りの高品質な生糸を生産する地域となりました。